住民へのアンケートによる京都市内の街路空間における植物栽培の実態調査

Questionnaire Survey of Growing Plants by Neighborhoods around Street Trees in Kyoto-city

大藪 崇司* 下村 孝** 小松さち恵**
Takashi OYABU Takashi SHIMOMURA Sachie KOMATSU

Abstract : The questionnaire was carried out to the residents who are performing flower cultivation in beds of roadside tree in northern Kyoto-city, and they were asked about aim of growing plants, evaluation of cultivation, the frequency and kinds of growing management. Consequently, it was shown by the store located in that plants cultivation in the street space in a residential area is positive, or a neighboring business district that the private management person of a store is enjoying plants cultivation. The residents who grow plants in street space announced the plant to a passerby or neighboring residents, and expecting the exchange with people who led plant cultivation was also shown. Furthermore, the questionnaire to a passerby showed that the plant which neighboring residents grew was bearing a wing, which forms the green of a town, and the necessity for the plant cultivation support by administration was suggested.

Keywords: roadside tree, passerby, flower cultivation, street space, planting bed

キーワード: 街路樹, 歩行者, 草花栽培, 街路空間, 植樹枡

1. 背景と目的

近年、都市部のほとんどの道路がアスファルトやインターロッキングなどの素材で舗装されているため、街路樹の植樹枡は地域住民に残された貴重な裸地ということが出来る。この裸地およびその周辺を利用している例として、地域住民による草花や低木などの植物栽培が挙げられる。このような行為は、街路樹の根元の殺風景な空間を華やかに演出すると同時に、付近に住む人々や歩行者の目を楽ませる効果が期待できる。花や緑は空間を美しく飾り、生活に潤いや安らぎを与えてくれるだけでなく、植物を栽培している人（以下、栽培者）に植物を育てる楽しみをもたらしていると考えられる。長沼・上甫木¹⁾は、神戸市の街路空間における住民による植物栽培を「勝手花壇」と称し、栽培活動の実態調査を行うとともに栽培者へのアンケート調査を通じて、栽培者同士、栽培者と歩行者、地域住民間においてコミュニケーションが生まれると報告している。篠塚ら²⁾は、市街地の鉢植えの緑について、住宅の形態および栽培樹種より考察を行い、近隣居住者間での緑の享受により栽培範囲が拡大していったと推測している。また、街路空間での花栽培については、Assennaら³⁾が札幌市を事例として住民へのアンケート調査を実施し、花が街路空間に彩りを提供していることを明らかにしている。京都市の道路区域内の植樹枡および植物栽培のコンテナなどが置かれている植樹枡外縁から1m内外の限られた空間（以下、植樹枡周辺）における植物栽培の実態については、下村ら⁴⁾が通りごとの栽培形態、樹種、種数などを報告している。それによると、地域住民は、植樹枡の18%において栽培活動を行っていると報告し、また、植樹枡内と民地側の植物との比較により、植樹枡周辺で植物栽培を行っていた住民の半数が建物側でも植物を栽培しており、栽培に関する高い意欲が植物栽培を街路空間まで拡大していったことが明らかにされている。

そこで本研究では、京都市の様々な用途地域を含む植樹枡周辺における住民による植物栽培に関して、植物栽培を行っている人を

対象としたアンケート調査を行い、栽培目的、植物栽培および街路空間全般に対する考えを明確にし、住民の植物栽培による街路空間修景の可能性を探ることとした。また、通行人を想定した回答者に対してアンケート調査を実施し、栽培者と通行人との間で街路空間の植物栽培への評価を比較検討した。

2. 研究方法

調査区域は、南北通である白川通と堀川通、東西通である北山通と今出川通に囲まれた主要な街路空間を設定した（図-1⁵⁾；表-1^{6,7)}）。各通りの街路空間において植物栽培が確認された箇所⁴⁾の前面に位置する住民および店舗経営者を調査対象としてアンケート調査を実施した。前述の目的に従い、アンケート項目は、植物栽培の形態、経歴、栽培を始めたきっかけ、植物の入手方法、管理頻度、民地での植栽の有無、街路空間の捉え方、近隣住民との関係、通行人との関係、植物栽培を行う上での不安や期待、植栽樹種、樹種選定方法など、20項目とした。アンケート調査は、対象者を個別で訪問のうえ回答を依頼したが、配布の際、植物栽

図-1 調査区域の概要

*京都市建設局 **京都府立大学人間環境学部

表－１ 調査路線の植樹柵形態、緑化延長、主要植栽樹種、用途地域および街路樹植栽年

植樹柵 形態	路線名称	緑化延長 (km)	主要植栽樹種	用途地域	街路樹植栽年
単 独 柵	北山通	1.84	イチヨウ	堀川通～新町通、叡山電鉄修学院駅～白川通は近隣商業地域、新町通～賀茂川は準住居地域、賀茂川～宝ヶ池通は第一種住居地域、宝ヶ池通～修学院駅は第二種中高層住居専用地域	昭和30年頃
	白川通	1.21	イチヨウ	北山通～北大路通は準住居地域、北大路通～今出川通は近隣商業地域	昭和30年頃
	烏丸通	0.80	イチヨウ	北大路通～紫明通は近隣商業地域、紫明通～今出川通は商業地域、ただし一部が第一種住居地域	明治45年頃
	今出川通	1.05	スズカケノキ、イチヨウ	寺町通～白川通は近隣商業地域、例外として川端通～東大路通の一部は準住居地域、東大路通～白川通の一部は第一種中高層住居専用地域	大正12年頃
	下鴨本通(北大路通～今出川通)	0.85	イチヨウ	北大路通～松ヶ崎通は近隣商業地域、松ヶ崎通～菱橋は準住居地域、菱橋～今出川通は商業地域	昭和30年頃
	堀川通(北山通～紫明通)	0.64	イチヨウ、アオギリ、ケヤキ(中央分離帯)	北山通～紫明通は準住居地域	昭和 8年頃
	北大路通 (烏丸通～鴨川,東大路通～白川通)	0.53	トウカエデ	烏丸通～鴨川は商業地域、東大路通～白川通の間は準住居地域	昭和 5年頃
連 続 柵	東大路通	0.68	スズカケノキ、イチヨウ、アベリア、ヒラドツツジ	近隣商業地域	大正10年頃
	下鴨本通(北山通～北大路通)	0.41	トウカエデ、シャリンバイ、キンモクセイ、ニシキギ	第二種中高層住居専用地域	昭和30年頃
	堀川通(紫明通～今出川通)	0.40	イチヨウ、シャリンバイ、ケヤキ(中央分離帯)	紫明通～鞍馬口通は準住居地域、鞍馬口通～今出川通は商業地域	昭和 8年頃
	北大路通 (堀川通～烏丸通,鴨川～東大路通)	1.30	トウカエデ、アベリア、シャリンバイ	堀川通～烏丸通は近隣商業地域、鴨川～東大路通は近隣商業地域	昭和 5年頃

街路樹植栽年については、植栽が始まったとされる年を記載した。また、戦災による延焼防止のために撤去され、戦後市街整備計画で復旧され、現在に至っている路線もある。

培を行っている当事者ではないと判明した場合、実際の栽培者を捜し出しアンケートを依頼した。配付は、2001年12月12日に行い、2001年12月18日に回収した。

また、通行人としては、通学や日常生活で周辺道路を使用している京都府立大学学生と生涯学習受講者を対象とした。街路空間での栽培活動をどのように捉えているかに関する8項目のアンケート調査を行った。30歳代～50歳代の回答者の比率が低かったため、やや片寄りのある結果となったことは否めないが、一定の傾向は示されたものと考ええる。

3. 植物栽培者を対象としたアンケート結果

(1) 栽培者の基本情報

植物栽培の行われていた箇所の前面住宅および店舗を回り558部のアンケートを配布した。有効回答数は、202部（回収率36％）であった（表－2）。回答者202人の属性は、女性136人に対して男性41人と女性の割合がかなり高くなっていた。年齢は、60歳代が51人（25％）で最も多く、次いで50歳代47人（23％）、70歳代以上41人（20％）となっていた。職業については、自営業主・家族従業員と答えた人が108人（53％）と半数を超え、主婦・無職が51人（25％）、会社員・公務員が10人（5％）、嘱託・パート・アルバイトが10人（5％）であった。

(2) 植物栽培に関する意識全般について

植物を栽培することについて、「好きである」とした回答者は、169人（84％）であった。街路空間で植物栽培をしている人は、基本的に植物栽培自体が好きな人であるということが判明した。しかし、「好きではない」と答えた人も5人（3％）見受けられた。また、街路空間以外で植物栽培を行っていた回答者が171人（85％）認められ、その内93人（54％）が「玄関前・入口前」、73人（42％）が「室内（店内）」、69人（40％）が「庭」、60人（34％）が「ベランダ」と回答した。その他の回答としては、屋上が10人、畑が2人、軒下が1人などであった。この結果は、街路空間で植物栽培を行っていた回答者の多くが、他の場所で栽培できない代償として街路空間で植物栽培を始めたのではないことを示唆しているものと考えられた。日本では、庭のある場合、基本的に門外に植物を置くことはなく、庭がないときに限り、門外・玄関前に植物を配してきたと言われてきたが、戸建て住宅団地の出現とともに庭があっても門外に植物を配する傾向が見受け

表－2 回答者の性別と年代

年齢層	20代	30代	40代	50代	60代	70代以上	どちらも	無回答	計
男性	5 42%	4 33%	7 32%	6 13%	12 24%	7 17%	0 0%	0 0%	41
女性	7 58%	8 67%	15 68%	39 83%	33 65%	29 71%	2 40%	3 25%	136
どちらも	0 0%	0 0%	0 0%	1 2%	1 2%	0 0%	3 60%	0 0%	5
無回答	0 0%	0 0%	0 0%	1 2%	5 10%	5 12%	0 0%	9 75%	20
計	12 100%	12 100%	22 100%	47 100%	51 100%	41 100%	5 100%	12 100%	202

られるようになってきたとの報告⁸⁾がある。この考えに従うと今回の結果は、植栽場所を建築敷地のみから街路空間にまで拡大して考えるようになってきたことを示唆していると思われる。街路空間で植物栽培を行う人の多くは、建築敷地で植物栽培を楽しむ傍ら、街路空間でも植物栽培を行っていると考えられた。

(3) 街路空間での植物栽培について

街路空間で植物栽培を始めた時期については、具体的に年号で回答があったもののみを集計し、有効回答数を154人とした。開始年度を比較したところ、2000年に栽培を始めた回答者が16人（10.4％）、2001年に栽培を始めた回答者が14人（9.1％）と、2000年以降に植物栽培を始めた人が比較的多いことが判明した。1990年以降に植物栽培を始めた回答者は、105人（68.2％）となった。高橋・下村⁹⁾によるグリーンアドバイザーへのアンケート調査によると、ガーデニングブームの始まった時期として、大阪で花博の行われた1990年を挙げる人が最も多かった。このガーデニングブームによって、植物栽培に興味を持ち、街路空間にまで植物栽培を拡げていった人が多いのではないかと推測された。また、通りごとに見ると、烏丸通では、東側・西側ともに、1990年より以前から植物栽培を行っていた回答者が6割を超えていた（図－2）。これは、烏丸通が京都駅から御所までの御幸通として、京都における最初の街路樹が整備され、明治45年には花が大きく目立つユリノキが植栽されていたことも影響していると思われる。さらに、烏丸通沿いは近隣商業地域となっており、比較的古くから受継がれてきた店舗・店舗兼住宅が軒を連ね、人の入れ代わりも余り無かったため、永続的に街路空間で植物栽培を行うことが可能だったと考えられた。反対に、北山通のように、近年、急速に開発されてきた通りは、ここ数年で栽培を始めたという回答者が多く見受けられた。

図－2 路線ごとの栽培開始年(N=154;ただし4名は路線名未記載)

街路空間で植物栽培を始めた理由・きっかけを図-3に示した。「街路空間が殺風景であったから」とした回答者が91人(47%)と最も多く、約半数の回答者が行政が整備した単調な街路空間に物足りなさを感じていたと考えられた。次いで、「ほかの場所に比べ日当たりが良かったため」が76人(39%)、「自宅(店舗)に十分な栽培スペースがなかったため」が66人(34%)と、他の空間で植物栽培を充分に楽しむことができない代償として街路空間を利用し始めたという回答者も多く存在したことが明らかとなった。その他の理由として、「ほかの人が栽培しているのを見て影響を受けて」、「近所の人や通人とのコミュニケーションを楽しむため」が共に48人(23%)、「自分の育てた植物を多くの人に見てもらうため」が42人(22%)、「住まいまたは店舗のイメージアップのため」が41人(21%)、「ただ植物を植えたかったから」が36人(18%)という結果であった。他の栽培者の影響を受けて植物栽培を始めた回答者が2割程度であるが存在したことから、今後も新たに植物栽培を始める人が出現するものと予想された。また、自分で育てた植物を披露する機会や周囲の人とのコミュニケーションの場を求めて、街路空間という開かれた空間で植物栽培を始めた回答者もいることが明らかとなった。物理的な効果を期待して植物栽培を始めた人の理由としては、「犬猫のフンや尿の対策として」が7人、「迷惑駐車防止のため」が3人、「踏み荒らしの防止のため」が1人認められ、植物栽培により街路空間をきれいに保つことにより、フン害、迷惑駐車や踏み荒らしなどを防止することができると期待されていた。

図-4は、植物栽培を始めたきっかけを年代別に示したものである。「日当たりを求めて」は、どの年代においても30%以上の高い割合を示していた。1979年以前から栽培を行っている回答者の中では、「日当たりを求めて」が最も多かった。1970年代～1990年代では、「栽培スペースがなかったため」という理由が3割以上と多くなっていた。1980年代以降に植物栽培を始めた回答者の中では、「街路空間が殺風景だったから」が最も多くなった。これは1980年代以降、都市開発に伴い、街路空間を殺風景と感じた回答者が栽培活動を始めたのではないかと考えられた。このように、時代の変化に伴い、街路空間も変遷し、近隣住民の街路空間に対する考えも変化してきたと推測された。

(4) 植物の入手方法

街路空間で利用している植物の入手方法については、「その場所に植えるために購入した」が88人(45%)と回答者の半数を占めた。また、「ほかの場所で栽培していたものを移動させた」が85人(43%)、「近所の人にもらった」が66人(34%)、「どこかに植えようと思って購入した」が51人(26%)、「自然に生えてきた」が18人(9%)となった。その場所に植えるために購入した回答者は、街路空間での植物栽培を植物購入時から念頭に入れているものと推測された。他の場所で栽培していたものを移動させた回答者は、図-4のデータから見て、スペースや日当たりの問題により、街路空間で植物を栽培するようになったと推測された。その他の回答としては、「身内や知人にもらった」が6人、「店(生花店)の商品を置いている」が2人、「あまっていた種

図-3 植物栽培を始めた理由(N=195)

を植えた」が2人などが挙げられた。街路空間での植物栽培は、周囲の人と接する機会が多く、種子、株分けなどの方法による繁殖や交換が多く行われていることが示された。

(5) 植物の管理について

街路空間で栽培している植物への灌水頻度は、「2日に1回未満」が95人(47%)、「2日に1回以上」が70人(35%)、「1日に1回以上」が10人(5%)となった。「2日に1回未満」の中では「週に3回程度」が最も多く32人、次いで「週に1回」が20人、「週に2回」が18人という結果となった。アンケートを実施したのが冬期であり、その時期の回数を示した今回の灌水回数は少ないと推測され、夏期であればより多くなったと思われる。

街路空間で植栽している植物への施肥の頻度は、「年4回未満」が101人(50%)と最も多く、ついで、「年4回以上年12回未満」が25人(12%)、「月1回以上」が7人(3%)となった。「年4回未満」の中では、「年に2回」が45人で最も多く、「年に1回」は31人であった。また、「行っていない」という回答者も58人(29%)見受けられた。

植物栽培箇所の除草頻度は、「月1回以上月4回未満」が99人(49%)、「月4回以上」が15人(7%)、「月1回未満」が10人(5%)となった。「月1回以上月4回未満」の中では、「月に1回」が63人と最も多かった。また、草が気になった時、適宜行う回答者も8人見受けられた。

街路空間で栽培している植物の植え替えについては、「植物が枯れた時に植え替える」が87人(46%)で、「花の時期に合わせて植え替える」は71人(37%)となった。街路空間での植物栽培は栽培者が栽培を楽しむという側面と、通行人が植物を見て目を楽しませるという両面を持っているため、植物が完全に枯れ人前に曝される前に植え替えを行うのが望ましいと考えられていた。花の時期に合わせて植え替えを行っていた人も4割弱見られ、今後、このような回答者に影響され、時期にあった花を植える人が増えてくることが期待できる。また、「植え替えを行ったことがない」という人も36人(19%)見られ、低木など植え替えの必要が無いものを栽培していた回答者も含まれていた。

(6) 街路空間に対する認識

植物栽培を行っている植樹枿およびその周辺の空間を「公共の空間である」と捉えていた植物栽培者が127人(63%)、「自宅の庭のようなもの」と捉えていた回答者が39人(19%)、「借地のようなもの」と捉えていた回答者が13人(6%)存在することが明らかとなった。「自宅の庭のようなもの」と考えていた回答者は、他の2項目と比較し、「庭」で植物栽培を行っている比率が最も少なかった(図-5)。

街路空間および歩道全域(以下、公有地)の利用に対する回答者の考えは、「空間を有効に活用することができて良い」が96人(48%)で最も多く、「自分の土地ではないので気が引ける」44人(22%)の2倍以上を示していた。これら回答者は、公有地に

図-4 植物栽培を始めた年代と理由(N=165)

おける「不法占用行為」を、土地の有効活用策の1つとして街路空間に彩りを添えている行為と考え、正当化しようとする傾向が認められた。また、「特に何も感じていない」という回答者も20人（10%）見受けられた。

(7) 周囲との関わり

街路空間で植物栽培をする際、周囲の街並みとの調和をどの程度考慮するかを尋ねたところ、「よく考える」が17人（10%）、「少し考える」が52人（30%）、「どちらともいえない」が40人（23%）、「あまり考えない」が53人（30%）、「全く考えない」が12人（7%）となった。路線ごとに見てみると、北山通南、北山通北、白川通西、下鴨本通西では、「よく考える」、「少し考える」という回答者が6割を超えていた。周囲の街並みとの調和に対する意識は、地域によって差が認められることが明らかとなった。どのような点に考慮しているかについては、「周辺の街並みの雰囲気と調和するか」が38人（56%）、「街路樹と調和するか」が29人（43%）、「周辺の街並みと色が合うか」が14人（21%）、「周辺の建物と材質が調和するか」が13人（19%）となっていた。

周囲の人がどのように評価しているかについて栽培者に自己判断を求めた質問では、「好評であると思う」が93人（51%）、「どちらともいえない」が36人（20%）、「好評ではないように思う」が2人（1%）という結果となった。5割を超える人が自らの植物栽培に自信をもっており、周囲の人々に好評であると考えていた。一方、「分からない」とした栽培者も52人（28%）存在し、街路空間での植物栽培に対して周囲の評価が分からず戸惑っている様子が伺われた。

近隣住民や通行人との交流として、「手入れをしていると声をかけられる」が142人（76%）、「植物の株分けなどを行っている」が57人（30%）、「留守時に水やりをやってもらう」が21人（11%）と、街路空間という多くの人が往来する空間で植物を栽培することで、植物を通じて近所の人や通行人と交流をすることができるといことが明確に示された。植物栽培により街路空間においてコミュニケーションの場を形成しているといえた。

(8) 問題点と今後のあり方

街路空間で植物栽培をする上で不安なこと・困っていることを尋ねたところ、「犬や猫の糞尿害に遭う」が100人（57%）、「鉢を盗られてしまう」が98人（56%）、「自転車や通行人により植物が荒らされる」が93人（53%）、「花を摘んでしまう人がいる」が70人（40%）となった。栽培者は犬や猫の尿が直接植物にかかるかと枯死する可能性があるため困惑しているが、一方、植物栽培を行わない犬や猫の飼主の中には、犬猫の糞尿を有効な肥料と勘違いしている者も存在しており、このような意識の相違が問題と考えられた。街路空間という公有地での植物栽培は、周囲の人とのコミュニケーションが楽しめるといった利点の一方で、このような弊害が付随していることが明らかとされた。

図－5 街路空間の捉え方とその他の栽培場所 (N=179)

また今後、街路空間で植物栽培を行う上で行政に望むことは何かという質問では、「街路空間での植物栽培を公認してほしい」が94人（67%）、「苗や用土・肥料の援助をしてほしい」が31人（22%）、「植樹柵を正式に貸し出してほしい」が20人（14%）となった。栽培者の心情としては、無断で公有地を占用していることに対して、多少の差はあるにしても良心のとがめがあるものと考えられ、気兼ねなく栽培を行うためにも、行政による植物栽培の公認を求める回答者が多く存在した。また、植樹柵の貸し出しを望む回答者もいることから、栽培者の中には、土地を借りてでも植物を栽培したいという欲求があると考えられた。

4. 通行人を対象としたアンケート結果

(1) 回答者の基本情報

2001年11月、12月に、京都府立大学学生ならびに生涯学習受講者を対象として564部のアンケートを配布し、421部の有効回答を得ることができた（回収率74%）。回答者は、男性が171人（41%）、女性が222人（53%）、性別不詳28人（7%）と、女性の回答者がやや多くなった。年齢は、10歳代が44人（10%）、20歳代が154人（37%）、60歳代が118（28%）、70歳代が69人（16%）となり、30歳代（3人）、40歳代（7人）、50歳代（15人）の意見が極端に少なくなっているが、本論では、10歳代・20歳代の若い世代の意見と60歳代、70歳代の意見としてアンケートの結果をまとめていくこととした。職業については、学生が202人（48%）、無職が118人（28%）、専業主婦が50人（12%）となっており、それ以外では、会社員（6人）、自営業主・家族従業員（8人）、無回答（18人）、その他（10人）となった。

(2) 自宅での植物栽培の有無

自宅で植物栽培を行っている回答者は、309人（73%）となった。回答者には、比較的自由な時間が多い60歳代、70歳代の人が多く、趣味として植物栽培を行っていたのではないかと考えられた。自宅で植物を栽培している箇所としては、「庭」が198人（64%）と最も多く、「玄関前」が172人（49%）、「室内」が154人（36%）となっていた。

(3) 自宅周辺の街路樹

自宅に面した通り沿いに街路樹があるかを尋ねたところ、街路樹があるとした回答者は103人（24%）となった。街路樹のある路線には、ビル、事務所や店舗などが建っていることが多く、住宅地域を形成しているのは一部であったため、自宅の近くに街路樹があるものの、自宅に面した通りに植樹柵はないという回答者が多かった。街路樹があるとした回答者のうち、街路空間で植物栽培を行っていた回答者は、22人（5%）のみであった。街路空間での植物栽培を実際に行っている人は街路樹周辺に住んでいる人の中でもごく少数であるといえる。

(4) 街路空間での植物栽培の認知度

図－6 目につく植樹柵内の様子

街路空間で植物栽培を行っていない回答者 400 人に対し、街路空間における植物栽培の事例を知っているか質問した結果、「よく知っている」が 105 人 (26%)、「知っている」が 171 人 (43%) と、7 割近くの回答者がその存在を認識していたことが明らかとなった。また、街路空間を通行していて、よく目にする植樹柵の様子を挙げてもらったところ、図-6 ようになった。「植樹柵保護盤が設置されている」250 人 (59%) や「自転車が置かれている」245 人 (58%) については、半数を超える人がよく目につくと挙げていた。60 歳代、70 歳代では、「雑草が多く生えている」112 人 (26%)、「近隣住民による植物栽培が行われている」107 人 (25%) が他の項目と比較して多くなっていた。

(5) 住民の街路空間との関わり

街路樹との関わりについて(i)から(v)の項目に、a.近隣住民は街路空間に対しどの程度関わるのが適当であるか、b.自分を近隣住民の立場においた時どの程度街路空間に関わってほしいと考えるか、という2つの立場より全回答者に5段階の評価を求めた(図-7)。

(i) 既存の街路樹・低木への水やりについて

a. 既存の街路樹や低木への水やりに関して、246 人 (58%) が「するべきだ」、「した方がよい」と回答した。行政側からも、夏期には市民新聞¹⁰⁾等により街路樹への水やりを呼びかけており、定期的な水やりに関しては地域住民で行ってもらいたいとの考えと合致していた。

b. 自分が付近に住んでいると仮定した時、「ぜひ行いたい」、「どちらかといえば行いたい」という回答者は、204 人 (48%) であった。前述において、「するべきだ」と答えた人に比べ、10%下がった。しかし、半数近い人が水やりについては行いたいと考えていた。

(ii) 落ち葉の片付け

a. 秋期に街路樹の落ち葉を清掃することに関して、323 人 (77%) が「するべきだ」、「した方がよい」と回答した。アンケートの自由記載欄には、街路空間が落ち葉で覆われ見栄えが悪い、側溝や樋が詰まる、通行人の転倒などの危険があるなどの意見が見受けられた。

b. 自分が落ち葉を清掃する立場に立った場合、255 人 (61%) の回答者が落ち葉の片付けを行いたいと考えていた。

(iii) 除草

a. 植樹柵内に生えてきた雑草の除草について、252 人 (59%) が「するべきだ」、「した方がよい」と回答した。落ち葉の清掃に比べると少ないが、自宅周辺の街路空間の除草を行った

図-7 近隣住民の望ましい街路樹との関わり方

方がよいと考えている人が6割程存在していることが明らかとなった。

b. 自分を行う立場に置いてみると、「ぜひ行いたい」、「どちらかといえば行いたい」と回答した回答者が186 人 (44%) となり、設問 a. の回答よりも減少した。「どちらかといえば行いたくない」、「行いたくない」とした回答者が117 人 (28%) となっており、行った方がよいと理解しながらも、自分では行いたくないという人が多いことが明らかとなった。

(iv) 観賞用の植物栽培

a. 観賞用の植物栽培に関しては、「どちらでもよい」が196 人 (47%) で半数を占めた。また、「ぜひ行いたい」、「行いたい」と回答した人は96 人 (23%) にとどまり、「どちらでもよい」と答えた人の半数以下であった。

b. 観賞用の植物栽培に関しては、他の項目と異なり、自分が行う立場になった場合、「ぜひ行いたい」、「行いたい」が111 人 (26%) と、設問 a. の23%と比較してわずかながら比率が大きくなった。

(v) 野菜の栽培

a. 野菜の栽培に関しては、「するべきではない」、「しない方がよい」と考える回答者が324 人 (77%) となっていた。観賞できる植物の栽培とは異なり、野菜の栽培は個人が収穫して楽しむという側面があるため、公有地を管理者の許可なく(以下、私的)利用していると強く感じ、反対する回答者の割合が一段と高くなったのではないかと推測された。

b. 自分が栽培を行う立場に立ったとしても「行いたくない」、「どちらかというも行いたくない」が331 人 (78%) と大半を占めた。

(6) 街路空間での植物栽培に関する評価

街路空間での植物栽培について、以下の(i)から(v)の側面から5段階で評価してもらった。

(i) 街路空間を華やかにする効果

「植物栽培により街路空間が華やかになること」について、「とても良い」、「良いと思う」とした回答者は304 人 (72%) となった。植物栽培によって殺風景な街路空間が華やかになることは、多くの人が歓迎しているといえる。

(ii) 空間の有効活用

「場所が有効に活用されること」に関して栽培活動の評価を求めたところ、「とても良い」、「良いと思う」とした回答者が243 人 (58%) となった。6割程の回答者が、街路樹の周辺という有効利用されていない空間を活用することに関して、良いことであると考えていた。栽培者へのアンケート回答をも参考にすると、街路空間での植物栽培は、ただ単に有効利用されていない空間の活用となるだけでなく、きれいに植栽することで、自転車の放置の防止、犬や猫の糞尿の対策ともなりうると考えられているようである。

(iii) 公有地における私的栽培

図-8 植物栽培の是非と公有地の私的利用

「公共の空間で私的に植物を栽培すること」についての是非を尋ねたところ、「良くない」、「あまり良くない」との回答が162人(39%)となり、「別に良い」、「全く構わない」と回答した回答者が150人(36%)と、ほぼ同じ割合であった。また、街路空間での植物栽培に反対している回答者の内、公有地で私的に植物を栽培するのは良くないと感じている回答者の割合が約7割を示し、賛成している回答者とどちらともいえない回答者に比べて高かった(図-8)。植物栽培に賛成している回答者の中にも、公有地の私的利用に関しては良くないと感じている回答者が3割強いることから、街路空間での植物栽培が100%私的な栽培にならないようなシステムづくりが必要なのではないかと考えられた。

また、真鍋¹¹⁾は、緑を足がかりにして自宅周辺の問題への関心が高まり、敷地境界を越えて地域を維持管理する行為や責任感覚が波及的に増大するという効果を指摘しており、公有地での地域住民の自発的な意志による植物栽培の効用を認め、その意志を尊重した街路空間づくりに活用していくべきではないかと考えられた。そのためには、行政によるバックアップが必要となるのではないかと考えられた。

(iv) 公有地における私物の放置

「栽培に関係しない私物を置くこと」についての是非を尋ねたところ、「良くない」、「あまり良くない」とした回答者が334人(79%)となった。植物栽培を賛成している89人の回答者の中で、私物を置くことの是非を質問したところ、79人(89%)の回答者が栽培に関係しない私物を置くことに関して、反対という姿勢を見せた。このことから、街路空間での植物栽培に賛成している人であっても、植物栽培に関係しない私物が街路空間に放置されることに関しては、快く思っていないということが判明した。

(v) きれいに栽培

「きれいに栽培されていたら植物栽培を行っても良いか」と尋ねたところ、「とても良い」、「良いと思う」とした回答者が265人(63%)となった。6割以上の回答者がきれいに栽培されていたら、植物栽培を認めるという姿勢を見せ、今後の街路空間での栽培活動における1つの方向性が示されたといえよう。

(7) 望まれる植樹柵のあり方

街路樹の下の上部の望ましい状態を尋ねたところ、「花の咲く植物の植えられている状態」が229人(56%)、「植樹柵保護盤が設置され歩道との段差のない状態」が180人(44%)、「常緑の植物が植えられている状態」が152人(37%)となった。花の咲く植物を求めている回答者が半数を超えた一方で、歩道との段差のない状態を求めている人も4割以上認められ、植物栽培によって街路空間を彩ることを考えると同時に、段差のない街路空間づくりを行う必要性が示された。また、「行政による低木の植えられている状態」が97人(24%)、「何も手を加えていない状態」が33人(8%)、「コンクリートで完全に舗装されている状態」も27人(7%)見受けられた。

(8) 望まれる植物栽培形態

住民が街路空間で植物栽培をする際、どのように栽培されることを望むかを尋ねたところ、「街ぐるみで周辺の街並みに調和した植物を栽培し、統一感を持たせるようにする」が170人(43%)で4割以上に支持され、街ぐるみで植物栽培を行い、統一感を持たせるようにすることが望まれていた。ついで「個人・各家庭で栽培してもらい、様々な植物を楽しめるようにする」が54人(14%)、「街ぐるみでいろいろな植物を栽培し、様々な植物を楽しめるようにする」が51人(13%)、「個人・各家庭に栽培は任せるが、植える植物に統一感を持たせるようにする」が42人(11%)となった。また、55人(14%)ではあるが、「植物栽培に反対」という回答者もいることが判明した。

5. まとめ

京都市内の様々な用途地域の街路空間で植物栽培を行っていた栽培者を対象としたアンケート調査では、8割以上の回答者が植物を栽培することが好きであると回答し、公共の空間であるという認識を持ったうえで、自らの栽培行為が街路空間に彩りを添えていると確信し、活動を行っていた。しかし、街路空間を自宅の庭のように捉えていた栽培者も2割存在する一方、自分の土地ではない場所における植物栽培に良心のとがめを感じている栽培者も2割存在していることが明らかとなった。植物栽培は、街路空間の環境を向上させるだけにとどまらず、自分の育てた植物を周囲の人に披露することや、植物を介して周囲の人々とコミュニケーションを図る効果が認められた。

通行人を想定した被験者へのアンケート調査では、7割以上の回答者が地域住民によって栽培されている植物によって街路空間が華やかになることを肯定的にとらえており、栽培者と同様の見解を持つことが示された。逆に、街路空間という公共の空間を菜園として私的に利用することなどに対しては、快く思わない回答者が7割強存在していることが認められた。そのことから、栽培者である街路樹近隣住民の節度ある栽培活動によって、通行人となりうる近隣住民の理解を得ることもできると考えられた。また、自らも草花栽培を行いたいという通行人もあり、栽培を通じてコミュニケーションが生まれるとの回答も示されたことから、今後、街路樹周辺での植物栽培に参加する住民の裾野を広げる可能性が推測された。

本研究結果から、街路樹周辺で住民によって栽培されている植物が、街の景観を向上させる緑の一翼を担っていることが示されたといえよう。また、街路樹周辺での植物栽培の公認や土地の提供などを求める声も少なくなかったことから、今後、行政がそのような支援に着手すれば、街路樹周辺での植物栽培がより普及し、良好な街路空間の創造の一助となりうるのではないかと推測された。

引用文献

- 1) 長沼真美・上甫木昭春(2003):神戸市の街路空間における沿道住民による「勝手花壇」の実態と住民意識に関する研究:ランドスケープ研究66(5), 819-824
- 2) 篠塚香里・横張真・栗田英治・渡辺貴史(2003):密集市街地における鉢植えの緑の配置と形態:ランドスケープ研究66(5), 825-828
- 3) Assenna TODOROVA・Shoichiro ASAKAWA・Tetsuya AIKOH(2002):Attitudes Towards Street Flowers in Sapporo: J.JILA65(5), 717-722
- 4) 下村孝・小松さち恵・大藪崇司(2004):京都市における街路樹植樹周辺での住民による植物栽培の実態:人間・植物関係学会雑誌3(2), 6-11
- 5) 京都市建設局水と緑環境部緑地管理課編(2002):京都市公園街路樹配置図(1/25,000)
- 6) 京都市建設局水と緑環境部緑地管理課編(1999):京都街路樹ガイド
- 7) 加藤五郎(1994):京都の公園・街路樹物語:京都造園懇談会, 19-29
- 8) 権孝妃・松尾英輔・高橋博之(2001):専用住宅の門外または玄関前の植物の配置状況について:ランドスケープ研究64(5), 375-378
- 9) 高橋ちぐさ・下村孝(2002):雑誌・書籍の出版動向及び記事内容から見たガーデニングブームの実態:ランドスケープ研究65(5), 397-400
- 10) 京都市広報課(2003):市民新聞8月1日号:京都市印刷物第151073号, 10
- 11) 真鍋千恵子(1998):下町の緑の実態と効用~街と人とを緑がつなぐ:ランドスケープ研究62(1), 42-44